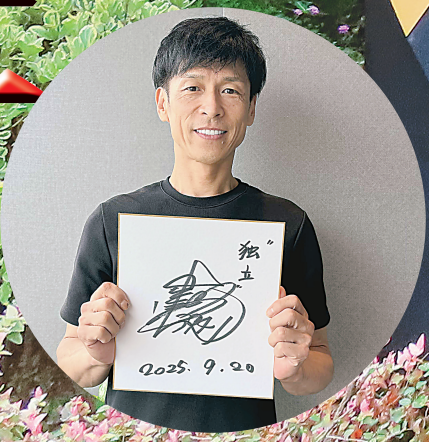


池田浩二 緊張と重圧



私を揺さぶる、グランプリ。12月16日からボートレース住之江で開幕する1年の総決算、SG「第40回グランプリ」に向けた特別企画「Road to THE GRAND PRIXキャンペーン」と題した企画の第3弾として、池田浩二（47＝愛知）にスポットライトをあてる。過去に出場したGPの振り返り、今年にかける意気込みなど、愛知支部のトップレーサー2人が、年末の一大番に向けて思いを語った。（取材日＝9月20日）



02年グランプリ初出場

02年、GPが「賞金王決定戦」と呼ばれていた時代、24歳の池田浩二はデビュー5年で初出場を果たした。TRは3、6、4着で敗退。順位決定戦は5着だった。優勝したのは植木通彦。4コースからまくって、イン浜野谷憲吾を下した。池田にとっては苦いGPデビューとなった。「全く歯が立たなかった。訓練生と選手みたいな感じ。レベルが違い過ぎた。技量も違うし、ペラのたたき方も違う。若い頃は全部に劣っていましたね」。

今年（9月24日現在）は賞金ランク2位（5年連続16度目の出場を当確としている）。「最初のうちは話す人がいなくて、相談できる相手もいなかった。昔は本当、GPは孤独すぎた。話し相手が増えたりリラックスできる。レースは別ですけど、西山（貴浩）とかは結構、面白いところがある。孤独を感じて、GPに行きたくな

いと思ったこともある。初出場の翌年は6、4、妨害失格。順位決定戦3着の成績を残した。

初めて黄金のヘルメットをかぶったのは、5度目の出場となった11年。33歳の池田はTRを1、3、2着で駆け抜け、初のファイナル1枠を手にしたが、経験したことのない重圧に襲われた。「これはねえ、いい気分はしなかったですね。緊張と重圧ですね。生きた心地がしない？ そんな感じですよ。当日、ピットを離れるまでは」。目指してきたものに最も近い位置にいたが、

もうないと思うよ

ないというか

今年最後でいい

というぐらいの気持ち

「レースに行きたくない」と感じていた。そして、13年に優勝した池田浩二（右）



自己紹介

名前	池田 浩二
生年月日	1978. 4. 3
自分の性格	キレター
趣味	ゴルフ
特技	なし
得意な決め手	にげ
好きな色	青
好きな食べ物	ラーメン
ひと言	もっとがんばれ

迎えた本番、トップタイのスタートから完壁に逃げて初制覇。ゴールの瞬間、ファンに向かって力強く右手でガッツポーズ。オイルスター、ダービーに続く年間3冠を達成。「池田時代」の到来を感じさせた。2度目の戴冠は13年。TRは1、1、5着で2度目のファイナル1枠となった。この時も、プレッシャーは変わらなかった。「優勝戦は重圧がありましたね。正直、着は何でもいいんですけど、Fだけではできない。なんだろうな。スタートなんて入れればいいんだけど、何か気持ち悪いんですけど、体感した者にしか分からないプレッシャー。とにかく解放されたいというところ。それでも、2度目も完璧に逃げた。「2回取ったからといって、次も取れるとかはないです。ただ、そのレースを取っただけ。それが継続するかわかれたら、それは思わない」。どこまでも淡々と、ほほ笑みひとつ見せずに振り返る。GPを勝つことの難しさを、誰よりも分かっているのかもしれない。

33、35歳で頂点に立った男は47歳になった。肉体も視力も衰えてくる。若い頃にできていたことが、できなくなっている。自分が一番そう感じている。「全体的に衰えている。僕も長くない。人が思っているよりきつい職業。まだできるって言われるけど、そう言っている人はアマチュアです。GPも今年最後だと思っている。もうないと思うよ。ないというか、今年最後でいいというぐらいの気持ちで走る」。衰えを口にしても、グラチャンで11度目のSG制覇。トップレーサーであり続ける。

「下の子が大きくなったら、お父さんはこんな仕事をしていると伝えたい」。そう言ったのは12年前、2度目V直後の会見。子どもは3人。一番下の長女は中学1年になった。「子どもが応援してくれると、モチベーションにはなる。昔はそんなことなかったんですけど、いい年齢になったからだと思いますね」。今年で最後なんて言わないで。ファンも、子どもたちもきっと、そう思っている。

枠番	選手名
1	菅 章哉
2	木下 翔太
3	森高 一真
4	瓜生 正義
5	守田 俊介
6	西山 貴浩



これが俺のグランプリだ。当企画に登場した選手が「理想のグランプリ」出走メンバーを独断で作成

↑池田選手が考える優勝戦メンバー↑